

で、胆汁酸の先駆物質はコレステロールであろうと考え、哺乳類から魚類まで各種の動物の胆汁を調べればその中間物質が得られるかも知れないと考えた。彼は一九二三年、弱冠三四歳で生化学教授になった。その下へ、正田政人が学位を得るために入門した。山口県の人である。彼に与えられたテーマはクマの胆汁であった。彼はクマの胆汁から胆汁酸の結晶を取り出した。融点二〇三度であった。その化学構造が決定し、ドイツ語で論文が書かれ、正田政人は医学博士の学位を得た。ウルソとかウルソ酸などの商品名で十社以上の薬品会社からUDCA製剤が市販されているが、正田政人博士も清水教授もそれを知らず。すでに故人となられている。

現在、産学一致が叫ばれ、役に立つ学問が珍重されているが、UDCAは純学問がいつの世にか実世界に役立つことのある一例であろう。今、たとえ役に立たなくとも、純学問を軽視してはいけないことは、科学史上他にも幾らも例があるのである。

(平成十七年九月例会)

矯正給食から窺える庶民日常食の史的観察

日野 英子

宮廷や貴人の食事については古文書の多くに現れて、それぞれの時代の食生活が窺えるが、庶民の食生活を詳細に記述するものは少ない。

庶民の日常食に近いものとして、囚人に対する給食からこれを推測することを目的として古記録を調査した。

収容した囚人の給食の記録が明確に得られるのは、江戸時代中期以降である。現代と異なり、往時の牢獄は刑の確定までの短期間を収容するのみの施設であったから、生命を支えるに足る最低限の食事が短い期間給与されたに過ぎなかった。

寛保二年、徳川吉宗の公事方御定書の公布以来囚人の処遇についても記録が現れ、給与された食事から一般庶民の日常の食生活が推測される。

さらに明治、大正、昭和、および現在に至る矯正給食の姿遷から、それぞれの時代の一般人の日常食がその時の社会を反映して眺められる。

(平成十七年九月例会)

明治期の精神病院に於ける看護婦養成について

— 府立巢鴨病院の実態から

澤田 恵子

明治に入り看護婦の養成が始まり、精神科に於いても東京府立巢鴨病院、根岸病院などで講習会が開催された。中でも府立巢鴨病院(現、都立松沢病院)の講習会は一九〇三年(明治三六)から始まり、五〇期生の卒業生を出しており、精神科に於ける人材養成に大きく影響をしている。今回は東京府立巢鴨病院に於ける講習会が開催された一九〇三年から看護

婦の養成が国の施策として制度化された一九一五年までの講習会の状況についてまとめた。

一九〇三年七/二九講習会を開始するにあたり「巣鴨病院普通看護法講習規則」を制定しており、講習会の目的は「一般患者及び精神病患者を看護する方法の教授」としている。講習生は三ヶ月以上看護に従事し品行方正で患者に対し、親切で高等小学校二年以上の学力のあるもの又は、入学試験に合格したものとしている。修業年限は三年で、前期は学科及び実習、後期は実務を行う。講習科目は解剖・生理大意、外科的看護法、内科的看護法、伝染病患者看護法、衛生学大意、精神病患者看護法、看護人に要する心得の七項目で構成されている。講師は医師が中心であったが包帯法は清水看護長、実地演習は看護長が担当していた。三年間の修業期間を終了できる講習生は約三割程度であった。

その原因としては、一看護人の資質や倫理観の不足、二看護人の待遇の悪さと看護の専門性が持ちにくい、三卒業した女子には看護婦免許が受けられたことから、講習内容や実習内容も高かった。以上のことから、講習会修了者は入学者と比較するとかなり少なかったが、その後の精神病院の看護を支える中心的役割を果たしたことは大きな意味がある。

(平成十七年九月例会)

黒死病はベストか

——黒死病の謎

滝上 正

ヒトベストはネズミノミの媒介によりベストネズミから感染、発症させられること、また、一三四八/五〇年、ヨーロッパで流行した黒死病はベストであったことが今までは信じられてきた。しかし、これらの定説に前世紀の中頃以降、疑問が提出されるようになってきたのである。

これらにたいする疑問の理由はベストに比し黒死病は域内伝播が速やかであったこと、死亡率が高かったこと、経過に電撃的なものが多かったこと、さらに、プポーなどのベストとして典型的症状に欠けていたこと、家畜の大量死を伴っていたこと、ネズミの先行死をみていなかったことなどにある。黒死病はベストと炭疽の合併流行であったと思われる。あわせて古典的ネズミノミ理論への批判も紹介した。

(平成十七年九月例会)